

VOL.5
2008.4

宮城学院女子大学

MG発——コミュニケーション情報誌“パルティール”

「Partir (パルティール)」はフランス語で“出発する”——
——新しい時代に飛びたとうとする女性たちを支え、励ますために、
宮城学院女子大学から発信するコミュニケーション情報誌です。

Partir

巻頭座談会

地域に根付く宮学の精神

宮学OG 磯田悠子さん・渡邊やすさん・大沼悦子さん × 宮城学院女子大学学長 吉崎泰博

シリーズ 思索の森の案内人たち

OG INTERVIEW 社会で活躍する卒業生たち

在学生の活躍を紹介! Students' Voice

MGの挑戦

MG Information

地域に根付く宮学の精神

今回は、宮学OGをゲストにお迎えしました。日本三景のひとつ、松島で観光業を営む磯田悠子さん、岩沼市の産業振興や中心市街地活性化事業に取り組む渡邊やすさん、江戸時代に紅花の産地として栄えた村田町の商人の歴史を探り、町おこしに貢献している大沼悦子さんの3人です。女性として輝きながら、地元の発展や活性化に貢献する先輩方にお話を伺いました。



吉崎学長 宮城学院は、キリスト教にもとづく自主・進取の精神や隣人愛を建学の精神として掲げていますが、それぞれ地域で活躍しておられる皆さんの活動は、その精神を体現されているように思います。今日はその辺りを伺ってみたいと思います。

まずは自己紹介をお願いします。

磯田さん 松島で旅館業をしております。もとは父が海岸通りで始めた小さな宿屋でした。私が中学の頃だったと思いますが、太平洋を見渡す山の上の、現在の場所に開業しました。私は大学を卒業して入社しまして、母親から「女将」として会社を受け継いだときは社員が200人おりました。自主・進取の精神、宮学の気風を持って、この社員たちを守らなければという思いでやってきました。

旅館の商品力を高めていくため、業界で意見交換をしようと、県内の旅館業の女将たちの「みやぎおかみ会」を作り、会長を務めているほか、松島旅館組合副組合長、(社)松島観光協会副会長などを務めています。松島においては観光業は重要な産業です。高齢化、少

子化が進むこれからの社会で、地域の活性化にどう取り組むかも課題です。

2008年秋には「仙台・宮城・アース・イン・シオンキャンペーン」という大型の観光誘致企画があります。すでにプレキャンペーンが始まっており、宮城・松島の魅力を知って頂くための活動に力を入れているところです。

渡邊さん 宮城学院短大在学中だった19歳のときに結婚、卒業と同時に主人が社長、私が副社長として、父の会社を継ぎました。農機具販売から建材卸業に商売を転換し、東北6県に支社を持つ会社に発展しました。2004年、70歳になったときに、会社を次代の

PROFILE

1970年大学家政学科卒業
磯田 悠子さん
卒業後、松島国際観光(株)ホテル松島大観荘入社。2001年同社取締役副社長就任。みやぎおかみ会会長、松島旅館組合副組合長、(社)松島観光協会副会長。

200人の社員を守るためにも、自主・進取、隣人愛の精神。宮学の気風を持ってやってきました。(磯田)

世の中に男性中心の考え方がなくなるまで、宮城学院は女子大であろうと思います。(吉崎学長)

若い人たちに譲り2人も退社しました。会社経営時代は、法人会理事、商工会理事なども務めてきましたが、現在は、岩沼市中心市街地の活性化を目指した町づくりにより市民や市の職員と一緒に参加しています。

市内の古い蔵や空き店舗を会場に、いろいろな趣味のグループの作品を展示するイベントでは、町がとてもにぎわったと好評でした。宮城学院同窓会の岩沼支部長を務めているのですが、イベントでは同窓生にもたくさん手伝ってもらいました。

同窓会支部では、岩沼市民会館で「ハートフルコンサート」を開催。宮学の音楽科の学生に出演して頂き、地域の人にとっても喜ばれました。こうした地域づくりはこれまでの恩返しのもり。商店街や町がにぎわうのがうれしいですね。

大沼さん 私は、村田で生まれ、村田で育ちました。158年前に本家から分家して6代目になりますが、先祖は紅花の商人だった

んです。紅花といえば山形ですが、村田は「奥州仙台紅花」の産地で集積地でした。紅花は、おもに笹谷峠を越え山形から酒田へ、西まわり航路で敦賀、琵琶湖を経由して京都に運ばれ、帰り船には、日用品の他に紅花染のお雛様も求めて来りました。

今のお金で32億円くらい商取引だったようですが、しほは遭難し大きな被害をうけています。紅花交易により上方文化・江戸文化がもたらされ、先祖の家訓の中に「質素儉約をし、儲かったお金は地域に還元する」というのがあり、商人としての先祖の生き様に感動しました。

そうした自分の先祖の生き方に興味を持ち、家にあつた江戸時代の古文書を読み解きながら、紅花を運んだルートなどの足跡をたどるなどして『紅花と村田の一人』という本を自費出版しました。蔵造りの本家の建物は町に寄贈され「やましよう記念館」として公開されていますが、そこでもそうした歴史を伝えています。

村田の蔵の町並みとともに、家に残る雛人形など、訪れた人に見ていただく「村田町家の雛巡り」も守り続けていきたいイベントです。



宮城学院女子大学
吉崎 泰博
学長

PROFILE

宮城学院女子大学 学長
吉崎 泰博
1943年生まれ。九州大学文学部卒業。メーランド大学で博士号取得。2002年北九州市立大学学長、2005年4月より本学学長就任。

心安らぐ江戸時代の暮らし

吉崎学長 大沼さんの先祖の家訓はキリスト教という隣人愛そのものですね。皆さんのように卒業生が社会に出て、地域づくりに大きな貢献をされている姿は、宮学生を力づけてくれるものだと思います。

在校生たちも学校や福祉施設など地域へ出てボランティアに取り組んでいます。高齢者施設で喫茶店を開いたり、音楽科の学生は「コンサート」をしたり、障がいのある子ども遊びの相手をするなど、幅広い奉仕活動に励んでいます。

皆さんの在学中の思い出は？





渡邊やすさん

PROFILE

1956年短大家政科卒
渡邊やすさん
 卒業と同時に父親の会社を引き継ぎ、夫とともに経営に携わる。2004年退社。その間、地域の法人会理事、商工会理事などを務める。宮学同窓会岩沼支部長を20年務める。

自分が生きていくのが精一杯だった時代。
 宮学に通えることが心の安らぎでした。(渡邊)

磯田さん こうして話していると、当時東三番丁の校舎から、駅までの道を友人とおしゃべりしながら歩いて通った思い出がよみがえります。クリスマス礼拝のハレルヤコーラスは、学年ごとにパートに分かれて一生懸命練習しましたね。同窓生が集まると今でも歌うことがあります。

渡邊さん 私の中学入学の頃は、終戦直後で雨漏りするよ



うなバラック校舎でした。自分が生きていくことに精一杯だった時代。自由で上品で明るい雰囲気、宮学に通うことが本当に幸せで、心の安らぎでした。通わせてくれた父親に本当に感謝したものです。学校が終わると飛んで帰って家の商売の手伝いをしました。

吉崎学長 短大時代は2年生の春休みに結婚したので学業と家の商売、結婚生活で大変でした。今、地域のために思っているのは、学生時代にそういうものが全くできなかったという思いがあるからかもしれません。

渡邊さん 宮学生の精神をしっかりと卒業されたんですね。

大沼さん 私の場合も学校が終われば家に帰って仕事がありました。県立高校から短大に入ったので、美しいレインガ造りの講堂で賛美歌を歌うことに特別の安らぎを感じていましたね。担任で詩人の石井昌光先生の言葉などは、自然への愛にあふれ、今でも心に残っているものがあります。噴水のまわりで語り合った友人たちとは、50年間、毎年クラス会をしているんです。悩みを話したり、助け合いながら友人の輪をつないでいる。宮学の精神でしょうか。

吉崎学長 噴水とバラのアーチは、思い出に残っていると感じています。これは桜ヶ丘キャンパスに移築して、当時の面影を残しています。

大沼さん 私も宮学が心の安らぎでした。私の娘？も宮城学院女子大学の英文学科と日本文学科を出しましたが、「宮学あつての今」ということをよく言っています。

すが社会に出たら「女だから」という甘えがあつてはならないと思います。女性の方にも甘えがある。男性と対等に仕事をしていくなら、責任を持つという責任をしっかりと考える。娘にも、自分にはできないと勝手に決めず、むしろ失敗は楽しんでほしい。いろいろなアドバイスをしています。従業員にもそういっています。後輩もそうあつて欲しい。宮学で能力を磨いて、リーダーとなる人が育って欲しいですね。

渡邊さん 昔言を呈するようですが、学内に外部の人が来たときにもっとあつたことがあつたのではないのでは？宮学の精神は心に持っていると思います。礼儀・マナーは社会に出たらとても大事です。

社でも家庭でも男性中心の考え方がほとんどなんです。私の意見としては、男性中心の意識が社会からなくなるまで、宮城学院は女子大であつたと思います。

渡邊さん これからは男性女性に関係なく、社会を一緒に創っていくという視点を持つことが大事。私が会社をやっていた時代は、業界的にも「女なの」という目で見られることもありました。

吉崎学長 本来は男性も女性も一人の人間としてそれぞれが力を出し合い、結果として楽しく生きていくことができればと思いますね。男女共同といつても、男がリーダーシップをとって女性がそれを助けるという考え方は、人

大沼さん 120年の歴史で5万人も輩出した卒業生たちの中には、掘り起こせばいろいろな体験をした人たちがいると思います。学生たちはもっと「古きをたずねて新しきを知る」ことをした方がいいですね。苦労しながら勉強してきた先輩たちの歴史があつて、今の宮学がある。過去にこだわるといふことではなく、宮学に誇りを持って前向きに伝えて欲しい。

吉崎学長 こういふ先輩たちがいて、今の宮学、きみたちがあるんだよと伝えたいですね。そういった素晴らしい伝統の上に、新しい時代の新しいニーズに合わせてさらに宮城学院を魅力的にしていきたいことが私の仕事です。今日は貴重なお話を伺うことが出来ました。お忙しい中、ありがとうございます。

在校生へのメッセージ

「独り善がり」であつてはならない、自分の評価は他人が決める。

磯田悠子さん

夢を持つ。その夢を実現しよう。

現在は常に未完成。

渡邊やすさん

「青春時代は一度ともうからない」その青春時代を大切にしておいて、過ぎて下さい。

大沼悦子さん



5万人ものいろいろな体験をした先輩がいるのだから、「古きをたずねて新しきを知る」ことをすすめます。(大沼)

思索の森林の案内人たち

「学問する」ということは、新しい知識の世界を開く喜びに満ちています。学問とは、きつてこれからの人生に輝きを与えてくれるはず……。そんな世界を案内してくれる先生方に、「学びの姿勢」についてお話を伺いました。

不思議に満ちた人の心を探る

行動から見えてくる心理

心理行動科学科は、昨年(2007年)新設されたばかりの学科です。「心理学」といつと多くの人がカウンセリング、心のケアといった言葉をあげます。それらは心理学の一つの領域ではありますが、心理学と「インコール」ではない。心理学とは、人の行動を見つめることと心のしくみを科学的に解き明かしてゆくという学問です。

私の専門としている発達社会心理学は、発達心理学と社会心理学の境界に位置します。

発達心理学は生まれてから死ぬまで一生の間で、人間の心がどう変化していくのかを探ります。社会心理学では、社会の中で他者とのかわりが人の行動や心理に与える影響を考えます。つまり、社会文化、時代の違いが、人間の心の発達や形式にどのようにかかわっているかを明らかにしていくのが発達社会心理学なのです。

自分の心を客観的に見つめる

一例として、日本社会とアメリカ社会ではものとならえ方が違いますが、「日本人らしさ」とはどのようなもので、どう自身に付けるものなのかでしょうか。

日本とアメリカでは「個人」の考え方が違います。日本人はあなたと私の心は一緒(でありたい)と考えるふしがあります。心を察する、心が伝わる、触れ合つて、「言わなくても分かる」ことを善しとする。一方アメリカでは、言わなくちゃわからないのは当たり前。身体と同じように心は別だからです。そして、最も「日本人らしさ」

しさ」が身につくのは青年期ではないかと私は考えています。

心理学では、人の心を冷静に、客観的に、合理的に見つめていきますが、そうした日本社会に生きる自分自身を自覚、あるいは省みることが、国際化の時代に必要なことだと思います。

学生に期待する点

今、学生たちは入学時から取り組んできた、発表会に向けての作業をしています。私が担当したグループは、実際に街に出て、バスや電車などの乗り物での人の態度や行動を観察し、なぜそうした行為をするのかを考えました。学生たちには、日々の出来事を取り上げ、人の心を推し測り、分析する中で、自分自身の心の成長も感じて欲しいと思います。

心理学を学ぶ学生にいたいのは、人間が人間の心を研究するのは、限界があるということ。4年間学んで、やっと人間を理解するための心構えができる。それだけ人の心は複雑で奥が深いということですね。

心理行動科学科
高田 利武 教授



発達社会心理学

国語教育

児童教育学科
豊澤 弘伸 教授

「教える」ということを深く考える

すべての学びの力になる国語力

国語表現の学習指導法や、教科書教材の開発、論説文の読解スキルの再構築など「国語教育」が専門です。国語科の授業というのは、言葉を中心にしていろいろなものが絡み合う営みです。感情や思考を伝える、表現するなど、生きていくための「言葉」の運用や操作を学ぶひとつの「言語活動」なんです。

よりよい言語活動としての授業には、教師自身の国語力が大事です。「教師の言葉」はすべて子どもに反映されます。特に小学校からいまでの年齢の児童にとっては模範にならないければいけませんし、学習指導過程や教材、評価の中の「教師の言葉」の使い方を考えることが授業力につながっていくと思えます。

また、国語の力というのはすべての教科に影響します。学習力をアップさせるためにも国語力の育成は大切なことです。

体験を柱に教師力を養う

教師の役割は、子どもが自立した学習を助けること。やらされているのではなく、自分

自身で学んでいる、自分でできるようになっていく喜びを持てるような教え方が理想だと思っています。徐々にかわりを減らし、ひとり立ちをさせる。言葉は悪いですが、だましましたし、そこまで牽引する役目です。

教職を目指す学生たちには、「教える」ということがどういうことなのか、徹底的に考えてもらっています。まずは自分が受けてきた教育、学習歴を振り返ってみます。小・中学校など過去に出会った先生に影響を受け、教職を目指すようになったという学生も多いのですが、よい教師とは、よい教育とは、どんなものなのか。体験してきたことを客観視してみることで自分なりの答えを導き出していくのです。

学びの中で体験は大きな力になります。ゼミの学生たちには、現役で活躍する「名人芸」といわれる先生方の授業を見たり、またはアシスタントとして活動を手伝ったりして、教育実習とは別に現場で多くの場面を体験してもらっています。

教員に必要なのは、指導力と精神力、そし

て人間性ではないでしょうか。指導力は先に述べた子どもの力を引き出す技術、精神力は、教師としてのゆるぎのない身構え・心構え。人間性とは、子どもを包容する大きくて豊かな心です。学生時代のいろいろな体験を通してぜひ養って欲しいと思います。



これを読んでもっと詳しく——「甘えの本」



● 高田先生おすすめの本 ●



『「甘え」の構造』
土居健郎 著
弘文堂 1,365円

精神科医の著者が、1950年代のアメリカ留学で受けたカルチャーショックをもとに、日本人に特有の感情である「甘え」の心理を解き明かす。1971年に出版されて以来読み継がれるロングセラー。2007年に出版された新増補版では、変質しつつある日本社会の根底に横たわる危機を分析した「甘え」の今昔についての書き下ろしを加えている。

● 豊澤先生おすすめの本 ●



『教えることの復権』
大村 はま / 羽谷剛彦・夏子 共著
ちくま新書 756円

今の日本の教育は、「詰め込み教育」の反省からか、子どもの自主性を重んじ、「教えること」より「学ぶこと」に重点が置かれている。この本は、教師が「教えるということ」を正面から見つめ直し、今もっとも必要なことは何かを、50年以上、国語教師として実践的指導を行ってきた教師とその教え子、教育社会学者で徹底的に考える。

社会で活躍する卒業生たち

O G I N T E R V I E W

多感な年ごろの中学生とともに泣き、ともに笑う毎日です

名取市立第一中学校
教諭

庄子 恵里子さん



— 宮学時代の思い出は？ —

私は中学から宮学生で、高校、大学で音楽を学びました。とにかく楽しかった思い出ばかり。同級生に歌手で女優の森公美子さんがいましたが、みんな明るく仲も良く、今でもよく同級会をしています。礼拝も心に残っています。生徒を指導するときに自然に出た言葉が、学生時代に礼拝で聞いた教えだったと後で気が付くことがあります。宮学時代のすべてが自分の基礎になっていると感じますね。

— 教職を目指したきっかけは？ —

大学4年ときの教育実習です。それまで教師になるつもりはまったくなかったのに、現場での生徒との触れ合いがすごく楽しくて…。今も思っています。泣いたり笑ったり多感な年ごろの中学生が成長していくのを、そばで一緒に悩んだり喜んだりできる、素敵な仕事です。

— 生徒とのかかわりの中で印象的なのは？ —

先日行われた秋の合唱コンクールは、生徒たちも指導する私も熱が入る行事。市の文化会館のステージでクフスごに歌います。練習を積み重ね、いいハーモニーが生まれた瞬間、ちよとぎくしゃくしていたクラスの雰囲気まで変わることがあります。音楽を教えるものとして、音楽を通したいろいろな感動をみんなで共有できるのはすごくうれしいですね。

— 教職を目指す学生へアドバイス —

教える技術も大事ですが、人間の教育に携わる者として一番大切なのは人間性だと思います。宮学で異性の目など気にしないで（遠慮しないで）、人間性を磨く努力をどんどんして欲しいと思います。

庄子 恵里子さん 1982年 学芸学部 音楽科声楽専攻卒

初任地は宮城県立山元養護学校。その後、名取市内の中学校を経て、2004年より名取市立第一中学校。吹奏楽部顧問。休日も部活動の指導で忙しくほとんど休みはないが、時間ができたら「カラオケ」でリフレッシュしている。

Students Voice

～在学生の活躍を紹介！～

ザンジバルの障がい者支援活動

2007年8月、国際文化学科の海外実習でアフリカ・タンザニアにあるザンジバル島に行きました。私たちの調査テーマは「ザンジバルの障がい者事情」です。3週間の実習期間中、多くの方々とお話の機会を伺いましたが、ザンジバルの現状は私たちの想像を超えていました。たとえばザンジバルでは目の不自由な方が使つづが足りません。足の不自由な方がいても車イスが足りません。ある団体では障がいを持った方々が靴を作つて収入を得ようとしていましたが、資金不足で満足いく製品を作れず困っていました。

私たちは以前から、知的発達障がいのある方々にスポーツトレーニングをサポートするボランティアをしているのですが、今回ザンジバルの現状を知り、お世話になった皆さんの力になりたいと募金活動を始めました。当面の目標額は15万円。車イスが台をザンジバルに送りたいと思います。車イスがあれば行動範囲も広くなりさまざまな可能性が生まれます。ザンジバルの皆さんの笑顔のために、どうか皆さんも力を貸してください。

寄付金あて先
郵便振替口座 00250-8-60800
「アフリカザンジバルの障害者を支援する会」



右: Y.Sさん
国際文化学科 3年
角田女子高等学校出身
左: S.Oさん
国際文化学科 3年
山形城北高等学校出身

国際文化学科の海外実習でアフリカ・タンザニアにあるザンジバル島に3週間の実習に行きました。



「120年展」 宮城学院の歴史に触れる

今回、私たちは学芸員課程の実習の一環として「宮城学院の120年展」に参加し、「宮城学院の昔の校舎を模型で再現する」という課題に取り組みました。作業は図面の単位をインチからミリメートルに変えるところから始まり、完成まで約3ヶ月かかりました。

最初は、模型造りのフロの方から指示されたことを一つ一つこなしていくという感じでしたが、だんだんここはどう作りたいか、どうしたらきれいに見えるか、当時の図面や写真を照らし合わせながら自分たちで考えるようになりました。

キャンパスが東三番丁にあったころの先輩方は当時のキャンパスに格別の思い入れがあり、とても楽しみにしているというお話を聞いて、皆さんの期待に応えられるよう、なるべく正確に再現したいと思いました。

完成した後はとても達成感があり、せんだいメディアタークで行われた「宮城学院の120年展」ではたくさんの方々に褒めの言葉をいただきました。市民の皆さんに宮城学院の歴史を知っていただくことができ、私たちもうれしく思います。



M.Kさん
生活文化学科 3年
福島西高等学校出身

宮城学院の昔の校舎を模型で再現し、「宮城学院の120年展」で展示、発表しました。

楽食プロジェクト

来年度(2008年夏)、耐震補強工事にもなつて学食の全面改修工事が行なわれることになりました。これを機に誕生したのが「楽食プロジェクト」です。

メンバーはさまざま、「食」に関心がある人、「空間」に関心がある人、学生はもちろん先生方や副手さんも参加しています。いずれにしても、楽食プロジェクトのコンセプトは「学食をもっと美味しく、もっと楽しく、もっと快適な空間にしたい」ということです。

私たちはこれから、宮子ならではのオリジナルメニューや旬の食材を取り入れた季節感のあるメニューを提案していくことを考えています。メニューだけではなくありません。学食でどんな食器を使うのか、デザインや質感も大切です。食堂のイスやテーブル、照明などの選択や配置も重要な要素です。手始めに他大学の学食研究を始めました。近隣の大学に視察(試食?)に行つて、いろいろ勉強しようと思つています。

学食はいま生まれ変わろうとしています。楽食プロジェクトが本格的に始動するのもこれからです。皆さんも私たちの学食一作りに参加してみませんか。

(問い合わせ先/人間文化学科・割田研究室)



Y.Kさん
食品栄養学科 2年
秋田西高等学校出身

学生食堂の耐震工事に伴い、食堂の改善案を考えようと発足した「楽食プロジェクト」に参加しています。



心理行動科学科「ココロサイコロ2007」

～体を使って学ぶ大切さ～



ポスターの作成は大変でした

2007年4月に開設された心理行動科学科のモットーは“机の上だけでは心理学は学べない”。このモットーを実現するための実践や実習をカリキュラムの随所にちりばめました。その一つが心理行動実践セミナーです。1年次対象の必修科目で、体を動かしながら学ぶ大切さに気付いてもらうことが目的です。

2007年度は3グループに分かれ、それぞれにテーマを考えて半年以上の実践を行ってきました。「ココロサイコロ」はその成果発表会

です。1回目の2007年度はAER28階エル・ソーラ仙台で開催し、100人近い来場者をお迎えしました。

仙台市内の落書きすべてを調査して(850カ所!)心理地理学的分析を行ったグループ、公共交通機関における乗車マナーを観察して行動分析を行ったグループ、人間の認知メカニズムを応用した錯覚デモンストレーションを作成したグループ、いずれも来場された方々へ1年間の成果を生き生きと説明していました。

大学での勉強と日常生活とをリンクさせることの大切さ、難しさ、そしてなによりもその楽しさを、肌で感じる経験になったことでしょう。1年生にこんな大事業を実行させてしまう心理行動科学科は、今後も挑戦をし続けます。



会場全景



テレビ番組で宣伝もしました



『ファインマン物理学 I 力学』

ファインマン、レイトン、サンズ(共著) 坪井忠二(訳)
(岩波書店)

“すべてのものはアトム—永久に動きまわっている小さな粒で、近い距離では互いに引き合うが、あまりに近付くと互いに反撥する—”

宇宙も人の体も「原子」から成り立っており、その小さな種のようなものは、応用のさせ方次第で無限の可能性をもっているということを教えてくれる本です。

◆学友会ニュースMG編集委員会(記事 鈴木 登志枝・イラスト 高野江里子)



『僕らは星のかげら』

—原子をつくった魔法の炉を探して—

マーカス・チャウン(著) 糸川 洋(訳) (ソフトバンク文庫)

「原子の世界」と「星の世界」…一見、関係がなさそうなこの2つ。原子という小さな世界がわかると宇宙という大きな世界がわかる。またその逆もあるのです。そして、人間がこの世界の間中に位置しており、すべては「つながっている」ということを感じさせてくれる一冊です。

先生に聞きました

● 私のおすすめ ●



インタビューでは、宇宙の魅力をお聞きすることができました。ホッとしたいとき、夜空を眺めてみてはいかがでしょうか?

児童教育学科 近松 健 先生

2007年度大学祭「カラフル」

10月20・21日の両日、さわやかな秋空のもと、2007年度の大学祭が開催されました。

初日は学生部委員会の企画として、NHK「三才深夜便」の人氣アンカー須磨佳津江さんの講演会が行なわれました。「人生をどう描きますか？小さなきっかけから彩りのある人生へ」と題し、須磨さんが出会った魅力的な人々やオーブンガーデンの数々についてお話を伺い、花と緑に囲まれて生きる人々の心の豊かさに感銘を受けました。講演終了後には、須磨さんと桜ヶ丘キャンパスの



緑の中を和やかに散策、歓談し、交流を深めました。

2日目の目玉は「お笑いライブ」。吉本興業のフットボールアワー、カラテカ、ハイキングウオーキング、地元仙台のニードル、C☆NEXTが場を盛り上げてくれました。1時間のライブはあっという間に終了。外に出ると、夜空を彩る打ち上げ花火に思わず感動しました。

統一テーマ「カラフル」にふさわしく多彩な展示、企画、模擬店に彩られた大学祭は、過去最高、7400人を超える来場者でにぎわいました。



「布田庸子メゾ・ソプラノ リサイタル」

去る11月20日(火)、太白区文化センター楽奏ホールにおいて、音楽科主催による「布田庸子メゾ・ソプラノ リサイタル」が開催されました。2008年3月で本学を退任された布田先生は、



宮城学院女子大学で育ち、仙台の音楽界を牽引しながら、長年後輩たちの教育にも力を注いでこられました。楽奏ホールは、その豊かな音楽の才と温かな人柄を慕う聴衆で満員となりました。

第一部は、ドイツ・フランス・ロシアなどの叙情的な芸術歌曲で、一曲一曲に布田先生の思い出と思いが込められ、聴き手の胸に迫ってきました。第二部は華やかなオペラの世界。本学非常勤講師・渡部ジュテイス先生との共演で、「椿姫」《ホフマン物語》《カルメン》の名アリア、名シーンが次々に登場し、聴衆をステージに引き込んでいきます。

鳴りやまない拍手にこたえてのアンコールは、リサイタルをピアノ伴奏で支えた、なかにしあかね先生の作品《きょうもひとつ》(星野富弘作詞)。人生を重ねて培われたその表現力は、私たちの胸に温かく深く染み込み、かけがえのないひとときとして刻み込まれました。

サークル・学友会情報

フォークダンス部

フォークダンス部は東北大学と合同で活動しています。例会と呼ばれる週2回の活動と大きなパーティーが年4回、年2回の大会と合宿、その他さまざまなイベントがあり、私たちは手づくりの衣装を身にまとい、日々たくさんの踊りを踊っています。練習は大変ですが、楽しいからこそ続けられます。また、他団体、他大学の方々と交流でき、全国に友だちができるのも魅力です。



オリエンテーリング部

「オリエンテーリング」という競技をご存知でしょうか？ 地図とコンパスを頼りに、地図に示された目的地までを順番に回り、その速さを競います。2007年3月のインカレでは選手権リレーの部で5位入賞、1年生だけで構成されたチームは新人賞をいただきました。今年のインカレも前年以上の成績を残せるように部員一丸となって活動したいと思います。



茶道部

私たち茶道部は、毎週水・木曜日の2回、裏千家の先生方にお稽古をしていただいています。年間行事としては、6月に学外で水無月茶会、8月は仙台市の裏千家青年部の方々と他大学合同の七夕茶会、後期には10月の大学祭参加茶会、11月には学外にて卒業茶会、12月はクリスマス茶会、1月には初釜と、毎月のように茶会を行います。お作法の修得は大変ですが、みんな楽しみながらお稽古に励んでいます。



振り返る時間

夏を目前にしたある日の日暮れ、薄紫色になった礼拝堂上空が一気に青みを増しながら、同時に雲の縁が橙色に染まるのを人文館4階の研究室からしばらく眺め

ていたことがある。日の入り前後の時間帯は、空の色や雲の陰影が数秒ごとに移りゆき、もつとも多彩な表情を見せる時である。日中は日射しを受けて明るく照らされていた礼拝堂の煉瓦の壁

多い。建物から外に漏れているその温かい光のなかに時折小さな幻灯のような人影も見える。

この頃、学生たちは一日の大半の授業が終わり、めいめいが思い思いに時間を過ごす時である。帰宅する者、足早にアルバイトに向かう者、クラブ・サークル活動に励む者、ひとり図書館で本を探す者。人文館の図書室をのぞいてみると、ゼミや卒論発表の資料作りに取り組んでいる学生で熱気に包まれていた。過ごす時の間の内容は皆



瞬間がある。

正門に向かう学生の下校の列もこの時間にはまばらとなり、静まりかえった中庭はとつと夕闇に包まれつつあるが、周囲の回廊わきに点々と灯る電灯には青白い光が入り、礼拝堂に直面する人文館の研究室・図書室やその間をつなぐ講義館の教室、各館の研究室・フロアにはまだ明かりが灯っている場所もある。

写真・文 人間文化学科 志村 文隆

編集後記

2007年秋の「宮城学院の120年展」(於せんだいメディアテーク)では「WOMAN 120」と題し宮城学院5万人の同窓生の中から各界で活躍している方々120人をパネルで紹介するコーナーを設けました。そうそうたる顔ぶれです。あらためて宮城学院の「底力」を感じました。

いま社会で輝いている女性がいます。いまキャンパスで輝いている女性がいます。私たちはこれからも「輝く女性」を応援していきたいと思ひます。

さて、本誌もおかげさまで第5号を迎えました。次号はリニューアルの予定です。大学広報委員会ではより充実した誌面作りのため、皆さまからのご意見、ご感想、情報提供をお待ちしております。partir@mgu.ac.jpまでお気軽にお寄せください。今後ともどうぞよろしくお祈りします。(M・F)